

Working Paper Series in
Study of “Knowledge Diplomacy” and
Internationalization of Higher Education Project

**Life-History on Teacher’s Self-Perception about their
motivations in Cambodian Universities**

Megumi Ebisuya, Junzhe Wang and Sachiko Funabashi

July, 2017

No. 2

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-based Research
Graduate School of Education
The University of Tokyo

カンボジア大学教員におけるモチベーションの自己認識 —ライフヒストリー分析を用いて—

戎谷 愛 (東京大学)

王 君喆 (上智大学)

船橋 幸穂 (King's College London)

Life-History on Teacher's Self-Perception about their motivations in Cambodian Universities

Megumi Ebisuya, The University of Tokyo,

Junzhe Wang, Sophia University,

Sachiho Funabashi, King's College London

Authors' Note

Megumi Ebisuya is a Master student, Graduate School of Frontier Science, The University of Tokyo.

Junzhe Wang is a Master student, Graduate School of Global Studies, Sophia University.

Sachiho Funabashi is a Master student, Graduate School of International Conflict Studies, King's college London.

This working paper is supported by the Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI), Kiban A, No. 15H02623 (Study of “Knowledge Diplomacy” and Internationalization of Higher Education in Asia Project).

Abstract

Although Cambodia is now one of the most rapid-growing countries in the world, its higher education sector has not been fully developed yet. In particular, because of the quantity-focused expansion policies which have been implemented by the Government since the 1980s, higher education institutions has been facing difficulties to improve the quality of education. Searching for resolutions, surveys have been conducted to understand the present situation, however, most investigations had been based on quantitative analysis and have rarely focused on the individuals, who are lecturing at Cambodian higher education institutions. The actual states of the teachers in the universities would not be recognized only by numerical data but also the story they told. Thus, this study collected qualitative data by conducting interviews with eight teaching staffs from three deferent universities in Cambodia. Interviews were carried out using Life History methods. In this paper, we aimed to reveal the life history of each lecturer that cannot be seen from the quantitative approach and focused on their motivations and self-recognition towards their professions. Naturally, the results show different stories of the lecturers’ lives, however, it is also suggested that the part-time lecturing staffs enjoy the frank working conditions and sharing their knowledge with younger generations simultaneously. Though most of the lecturers have stopped doing their own research and this situation prevents the development in higher education, on the other hand, they spare time for the preparation for the lectures, implying the helpful and caring education.

Keywords : Cambodia, Higher Education, Lecturer, Motivation, Life History

カンボジア大学教員におけるモチベーションの自己認識

—ライフヒストリー分析を用いて—

1. はじめに

本研究の目的は、(1)カンボジアの大学教員がどのようなモチベーションによって教授職を選択し教授活動を維持してきたのか、また(2)モチベーションにどのような変容の阻害もしくは促進の要因が存在したのか、について個人に焦点を当て、知見を得ることである。

カンボジアの高等教育セクターは、1990年代末から量的拡大を広げ、1997年には18校しかなかった施設が、2011年には97校と、飛躍的に量的拡大が行われている。しかし、政府からの不十分な財政的援助に加え、首尾一貫した政策が検討されなかったことを背景に、高等教育機関は労働市場や経済に適切な質のプログラムを提供していない。計画経済体制崩壊後の1991年頃、高等教育に費やされた費用は教育予算のわずか2%であったことがこれを証明している。1990年代の終わり頃にかけて、後期中等教育の卒業者が増加したことから、民営化として高等教育機関の増設が開始されたのだが、現在に至っても、高等教育制度の混迷は更なる拡大の一端を辿っている。なぜなら、十分な品質保障システムのない私立校の量的拡大は、貧弱な訓練を受けた卒業生の供給過剰を生み出すことではないからだ。経済発展の継続は、有能で熟練した労働力を生み出すことを必要とするが、急速な量的拡大及び国際化の影響のために、従来の包括的な高等教育制度の管理ではもはや機能しない。現行の制度を十全なものへと発展させるために、今一度再検討することが喫緊の課題である。

「高等教育の質」には様々な定義や評価方法

があるが、先行研究で明らかとなった、教員の学位取得率や低賃金による重労働は、質保証を妨げる課題の一つとして考えられる。更に、Kitamura, Umemiya and Hirosato (2015)は「給与や施設設備への財政支援及び研究補助員といった人的支援なしに、カンボジアの大学機関における労働環境の改善は成し得ない」(2015, p.18)と、その劣悪な労働環境を問題視している。本研究では、このような環境下にいる大学教員が教育の質をどのように保っているのだろうか、との問いを設定し、大学教員がいつ、何をきっかけに、どのようにしてモチベーションの形成に変容をもたらしたのか、について現地調査を行った。特にカンボジアの教員の多くは内戦やポルポト政権の支配を経験し、治安・経済・政治的影響に大きく左右されてきたと推測出来るため、単に知識や経験によるモチベーションの変容を指すのではなく、家庭や社会的歴史的背景との相互作用による変容過程を踏まえる事で、教育の質的向上に資する外からの働きかけを教員人生の中に適切に位置付ける事が可能となると考える。

ここでの「モチベーション」とは、小山(1986)藤澤(2004)が「教師の力量は指導技術的な側面と人間の資質的側面からなる」と定義したうちの、「人間の資質的側面」に焦点を当て、知的向上心、教育観、心身の健康といった教授職を行っていく上で動機付けとなる「モチベーション」について探究する。

2. 先行研究の概要

本章では、カンボジアにおける高等教育及び大学教員に関する先行研究を概観するが、総じてその数は限られていることを指摘しておきたい。

Kitamura et al. (2015) は、カンボジアの主な高等教育機関の教員にアンケート調査を実施し、531名の有効回答を基に以下の4点を指摘した。(1)私立大学に比べ、国公立大学の方が労働環境・教育環境・研究環境に対する満足度が高い。(2)若年層の大学教員はより多くの時間を教育に割いており、それが仕事に対する低い満足度の要因となっている。(3)工学や農業分野を専門とする大学教員は特に仕事に対する満足度が低い。(4)高等教育機関全体を通して、研究を促す組織的発達那不十分である、という点である。(2)に関しては、30代、40代、50代の教員の50%前後が、週に10時間以下を教育活動に充てているのに対し、20代の教員の46.3%は11～20時間を割いているという点が指摘されている。その他、博士号を取得する教師の増加が、高度人材の発達と高等教育質向上の証左となると期待を示した上で、更に教員の労働環境の改善などを提案している。しかしながら、この研究の大部分はアンケートの数値的結果を示すのに割かれており、それぞれの問題を引き起こした要因については十分に説明されていない。量的研究に用いられるアンケート調査では、想定される回答の中で選択することが前提とされているため、大学教員の個々の事情に関しては深く窺い知ることができないのである。

カンボジアの高等教育に関しては、世界銀行が現状分析を行っている。2010年の“Cambodia: Higher Education Quality and Capacity Improvement Project”ではカンボジアの現状に関

して、「経済成長を遂げており、失業は適度なレベルではあるが、熟練・準熟練労働者に対する市場は非常に小さい」と述べている。この熟練・準熟練労働者には無論、学士・修士・博士号取得者も含まれるものと考えられる。またカンボジアの高等教育セクターに今後期待する進歩としては、組織管理をより体系的にして透明性を高めること、教育と研究の相互関係を認識させるための政策を立案することなどが挙げられている。同様に、カンボジアの高等教育における教員は必ずしも博士号を持っていないとも良いこと、学士・修士号取得者でも十分であることを指摘した上で、それを周知させる政策が必要であると示している。ちなみに Ministry of Education, Youth and Sports による2008～2012年のデータでは、カンボジアの高等教育機関における教育スタッフのうち、修士号取得者は約4200人から約6500人まで増加しており、いずれの年代においても全体の半分以上を占めている。博士号取得者は約600人から約900人と、増加こそしているもの、3000人から約3900人まで上昇した学士号取得者と比べれば三分の一にも満たない割合である。

世界銀行と同様に、アジア開発銀行もカンボジアにおける高等教育について調査結果を発表している。2014年の報告書で指摘されたのは、ポルポト政権の弾圧によりサブセクターが決定的に破壊されたこと、現在は人口統計の転換期にあり、都市部への移民が激増していること、構造的な変換に頼る経済政策ばかりでスキルが求められていないこと、高等教育課程への準備を整え、次のステップへ進む学生を増やすためにも、初等中等教育の連携が必要であること等である。

これまでの先行研究を要約すると、カンボジ

アの高等教育における核心的な課題は、以下の四つにまとめられる。(1)私立大学の乱立を抑制する包括的な高等教育政策の実施(2)労働市場とカリキュラムのミスマッチを改善(3)教員の給与と質の向上(4)郊外(農村部)からのアクセスと奨学金制度の拡充である。これらの課題に抜本的に対応するには、より一層高等教育の「質保証」に視点を移していくことが必要であるだろう。質保証を訴える理由として、第一に、地域・学校間競争に有効であること、第二に、経済成長の継続、第三に高等教育機関が国の象徴である意識を高めること、を挙げる。

以上のように、カンボジアの高等教育が抱える問題は多くの機関や研究者によって指摘されてきたが、いずれも量的データの分析に基づく政策や制度面への示唆であり、質の改善が喫緊の課題であるにも拘らず、実現可能性に欠けている点が懸念される。教育者及び被教育者の視点に立った質的な研究は未だ行われていない為、詳細且つ的確な示唆を得る必要性を訴えると共に、本研究がその貢献に価する事を示したい。

3. 方法論

3.1 ライフヒストリーについて

個々人の内面に生起する長期的な変容を調査するにあたっては、アンケートやテキストでは限界があることは指摘されている。なぜならば、教授的力量がどのような社会的背景の中で、過去の出来事とどのように関連付けられ、筋立てられたかを合理化・情報化された発言録によって明らかにする事は困難であるからだ。そのため本研究では、個人としての教員を歴史的な時間の中で変化していく存在と捉える「ライフヒストリー分析」を用いる。中野卓は著書「ライフヒストリーの社会学」の中で、「本人が主体的

に捉えた自己の人生の歴史を調査者の協力のもとに、本人が口述あるいは記述した作品である。」

(中野, 1991, p.191)とライフヒストリーを定義付けた。つまり、本人の過去・現在に対する自己認識を、その話しぶりや語り口から考察しようとする形式である。この研究方法の特徴は、現在は過去からの蓄積であると捉え、この上に未来があることを意識している点である(澤村, 2005, p.99)。この手法を用いる研究者は更に、個人のライフに着目し、単に口述を書き起こし、記録するだけでなく、語りを時系列順に組み替えるなど、編集を通して再構築された上で発表される(桜井, 2002, p.9)。

概して、ライフヒストリー分析は、アンケートを大量に配布し、データを統計的に分析する量的な研究方法とは根本から異なる。また、教師との対話で得るデータは、教師の生の声であり、研究者や援助機関の興味関心ではなく、教師自身の問題から研究を進めることを意味する(山田, 2001, p.199)。開発分野においては一般的な現状からアンケート調査を行う場合が多く、個人にフォーカスを当てるライフヒストリー調査の例はまだ数が少ないが、一般認識から離れた個人の実態を探る上では、まさに適当な手法である。本研究では、既存のイメージや一般認識とは違った、教員たち一人一人の生の声を聴くためにライフヒストリー手法を採用した。

3.2 調査の概要

カンボジア王国シェムリアップ州及びバタンバン州において、国立・私立大学の教員8名にインタビュー調査を行った。調査期間は2015年2月29日から3月3日までである。内訳は、私立大学である PANNASATRA university 教員4名、Angkor university 教員3名及び国立大学で

ある Battambang university 教員 1 名であり、いずれも性別は男性である。対象数は合計 8 名であるが、本論文では 3 名のみ取り上げ詳細に記述する。しかし、他の 5 名を含めた示唆等は終章にて指摘する事とする。

調査方法については、上述の通りライフヒストリー・インタビューを用いた。事前に、ビデオの撮影とヴォイスレコーダーの録音の許可を得て、インタビューに臨んだ。言語は英語である。

4. カンボジア大学教員のライフヒストリー

本章では、前章に基づく調査を踏まえ、分析結果を述べる。計 8 名のインタビューデータのうち、3 名のみ詳細に取り上げる。その理由として、十分な調査時間と情報量が得られた。それぞれ、PANNASATRA university から 2 名、Angkor university から 1 名を選出した為、表記を「P1 教員」「P2 教員」「A1 教員」とする。また、引用するインタビュー内容については、特

徹的且つ特に強く言及したい箇所を抽出し、山崎 (2004, pp.71-84)が提案する「会話分析の方法と会話データの記述法」に基づいて、エスノメソドロジー的要素を検討しながら分析を行った。

4.1 P1 教員のライフヒストリー

P1 教員 (調査当時 37 歳) は PANNASASTRA University にてフルタイムで働く教員で、英語の他、開発分野等を担当している。彼は、先に教職に就いてから、30 代で留学した稀有な例である。初めの職として教員を選択した理由に関しては、当時は教員の就職口が広く、容易に見つけることができた為、と述べている。彼は初めから教員を希望していたわけではなく、省庁職員の仕事を探していたが、当時は地方にしか勤務地がなく、更に一年目は正式な採用を認められず給与が支払われない等の悪条件があった為、教員となることを決めた。教員となった動機について、本人は図 1 のように語っている。

表 1 P1 教員年譜

P1 大学教員のライフヒストリー	年	年齢	内的要因	エピソード	外的要因
	1991	14		地方からブノンペンに出る	勉学の機会を得るため両親の勧め
	1992	15	英語より仏語を勉強したい	高校進学 英語塾に通い始める	叔父の強い勧めで英語塾に通う
	2000	23	労働移住に関する研究を行う	王立ブノンペン修士卒業(開発学)	
	2001	24	省庁に就職し開発に携わりたかった	Australia Center for Educationで英語の教授職に就く	教授職は求人が多いため就職が容易
	2003	26		大学進学塾に転職	給与が低い
	2005	28	養育費が必要になる	Pannasastra Universityに転職	子の誕生 私立大学は比較的給与が良い
	2007	30	孤独に耐えきれなかった	マレーシアに留学/二か月で中退	周囲から留学を勧められる
	2011	34	カンボジアの政策を研究	韓国に留学(MA:公共政策学)	在学中、半分はカンボジア滞在
	2013	36	教授職の意義に目覚める	帰国後、NGOで勤務	ハードスケジュール/激務

(前略) 私は教師の道まっしぐらでした。教師の道しかありませんでした。
ええ、そして (右手で頭を触る)、カンボジアでは、教師はとても就きやすい職業です。
多くのポストがあります。
お分かりの通り、カンボジアは途上国ですからね? (両手を胸の前で振る) (後略)

図1 P1 インタビュー 00:13:40 の会話 (筆者訳)

また、P1 教員は自身を熱心な勉強家であると認識しておらず、高校在学中に英語学校に通った動機も、伯父の薦めによるものであった。当時の得意科目は生物だったが、生物を専攻に選んだ場合、将来は生物の教員になる選択肢しかないという事を聞き断念した。代わりに大学で専攻したのは、開発や公共政策分野であった。しかし、結果的には2001年に教員として就職し、その後も給与や待遇を理由に何校か勤務先を転々としている。2007年に PANNASATRA University で教員の職を得、インタビュー時点(2016年3月)まで在籍している。PANNASASUTRA University で教鞭をとる間、

マレーシアと韓国に渡航し大学院に通った。奨学金で留学したマレーシアでは同じ学生たちと顔を合わす機会が少なく、孤独を感じ、二ヶ月で帰国を決心したが、韓国へは一年間在籍し、修士号を取得した。しかし、彼にとって転機はその後に来た。韓国から帰国後、彼は日本の NGO で働くことになったのだが、これまでの教員生活とはあまりにも異なるワーキングスタイルに疲れを感じ、教員という仕事に対し急激に親しみを覚えるようになったのである。NGO で働いていた際の心境の変化について、実際の言葉を図2に示す。

(前略) NGO の仕事は、給料はよくありませんし、働く環境もよくありません。
働く環境は、教師としての仕事より大変です。(左手を前に出す)
だから、教師の道に戻ったのです。
私は修士課程で開発学のコースを学び、勉強したので、だから私はそれを教え、自分自身の経験を次の世代にシェアすることができます。(中略)
私、私、私は (大きくうなずく) Pannasastra University で働けて幸せです。
何故ならこの仕事は他人からの圧力がありませんし、やりたいことができる自由がありません。
つまり、これがこの大学で、長く、2007年に始めてから今まで、こんなに長い間働くことができた理由です。(後略)

図2 P1 インタビュー 00:18:10 の会話 (筆者訳)

NGOにて連日ハードスケジュールをこなしつつも、彼の心は教員時代に傾くようになっていった。曰く、教員はより自由で、他人からの圧力も強くなく、心地良いということである。また、彼は同時に、自身が学んで得た知識や経験を若い世代の人々に教えること、シェアすることの重要性をも自覚したようである。自分だからこぞできる授業、コースがあるという認識が、彼を再び教壇に向かわせたのである。

以上をまとめると、当初P1教員は給与や就職の容易さを理由に、消極的な動機で教員となることを選んだが、長期間にわたって教職に留まり、更に他の職場を経験した事で教師という仕事への自らの適性を確認したという事が分かった。こうした自己認識が教員としてのモチベーションを最大まで高め、今後も教員を続けていきたいという積極性を生み出したと考えられる。

4.2 P2教員のライフヒストリー

P2教員（調査時33歳）はPANNASASTRA Universityでパートタイムの教員として英語やその他の講義を担当している。三人兄弟の末っ子として生まれ、父親は教師であった。彼は父親に大きな影響を受けて育った、と語っている。

初等・中等学校時代、彼は全く勉強が好きではなかった。勉強の意義が見出せず、友達と遊ぶために学校に行っていたと振り返っている。ターニングポイントとなったのは高校生時代であり、周りの友人が携帯電話やバイク、洋服などの「物」を所有するようになり、自分もそれらを所有するためには金銭を稼がなければならぬ、働かなければならぬ、という事に気付いたと言う。教師である父親の給与は非常に低

表2 P2教員年譜

P2 大学教員の ライフヒストリー	年	年齢	内的要因	エピソード	外的要因
			・勉強嫌いなテストに受かる為だけに勉強をしていた ・小学校教員であった父へのあこがれ	ブノンペンで生まれ育つ	10歳の時火事で家が全焼 貧しい家庭で苦勞した
	2003	17	・貧しい為大学へは行けないだろう ・周りの裕福な友人が羨ましい ・物を買う為に働いて高い給与を得たい	高校入学	周りの友人が高級な服やバイク、携帯電話を所持するようになる
	2004	18	・英語を学ぶ事は重要だという認識 ・英語が上達し自信を持つ ・英語好きが更に高まる	英語の私塾に通い始める	叔父が金銭的にサポート
	2007	23		王立ブノンペン大学卒業(英語科)	NGOで英語を教えるボランティア
	2011	26		北京に留学(MBA取得)	奨学金を獲得
	2013	28	若い世代に影響を与える事ができる唯一の職業である	帰国後、Pannasastra Universityに就職	翻訳会社を経営

く、家は貧しかったため、恐らく大学には進学

できないだろうという見当もついており、彼は

そうした環境から、将来の事を真面目に考えなければならぬと認識したと語っている。

折しも、伯父の援助で彼は英語学校に通う事となった。当時カンボジアでは教員や資料不足のため、外国語としてはフランス語を教える事がほとんどで、彼は以前から英語が重要だと意識していたにも拘らず、高校では教わることが出来なかった。初めは成績が低迷していたが、運よく奨学金を受ける機会を掴み、以降は熱心に勉学に励むようになった。P2 教員は、当時の事を「ラッキーだった」と繰り返す一方で、自身の上達の速さを誇りにし、「人生初の成功だった」とも語っている。こうした自己肯定感が、本人のモチベーションを更に高めていった。

奨学金を得て北京の大学院に留学し、ビジネス分野の修士号を取得した。そして、帰国後に大学教員となる。教員を選んだ理由に関して明確には語らなかったものの、父親の影響は加味

されて然るべきであろう。彼は教員としては 2 年目であるにも拘らず、教員としてのモチベーションについては明晰な口調で図 3 のように語った。

彼は教員という仕事について、「若い世代に示唆を与える唯一の存在」と位置付け、カンボジアの未来はそうした若い学生の手にかけており、彼らを鼓舞できる教員には、大いなる意義があると理解している。また、P2 教員は自身で通訳会社を経営しており、ビジネスにも非常に熱心だが、他の仕事が増えても教師をやめるつもりはないと強く語っている。英語という得意科目を発見して以来、高いモチベーションを保ち続け、現在まで至っているように見受けられる。

彼にとっての最初の転換点は、物を買うために稼ぐ、稼ぐために働く、という現実気付いたことであった。その後、英語ができる自分自

(前略) ええと、国の経済は、知識が豊富な労働者、知識が豊富な労働者たちにかかっています。

教育された人々、よく教育された人々、経済を引っ張る人々が、結果として経済成長に貢献しているので、そういう人々を育てることが教えることのモチベーションの一つです。

例えば、もし私が教えることをやめたら (両手を組む)

私は多くの若いカンボジア人たちに知的な刺激を与えることができません、でしょう？

だから、学校、教室にいる間、私は、時々子どもたちに、教育の大切さについて話すのに時間を費やしています。

大事な教えは、国の経済が、あなたがた生徒にかかっている、あなたがたは教育されなければならないし、教育を受ければ、よい教育を受ければ、(語気を強める)

将来きっとよい仕事が見つかるということなのです。

図 3 P2 インタビュー 00:12:30 の会話 (筆者訳)

身を見出し、初めて「成功」を手に入れたことで自信をつけ、以降留学を経て教員となったイ

インタビュー時点においても、その高い意識をキープしている。P1 教員に引き続き、こうした自己肯定感がモチベーションに大いに作用するということが分かる。

4.3 A1 教員のライフストーリー

A1 教員(調査時 44 歳)は、Angkor university でパートタイムの教員である。1972 年に首都であるプノンペンにて 4 人兄弟の長男として生まれた。父は国家公務員であり、比較的裕福な家庭の生まれであるが、彼が第一希望として受験勉強に励んだ医学部は、家族の経済的援助が困難な為に、諦める事を選ばざるを得なかった。農学部に入學後、同時に英語の勉強を始めた。化学を得意とし、クローンや遺伝子組み換えコーンの研究に励んだものの、卒業後は化学で就

職する道がなく、学習塾の英語の教師となった。その後、韓国へ留学し生化学の修士号を取得した。しかし、帰国後、依然としてカンボジア国内で化学の重要性は理解されておらず、就職難に陥った。後に農林省から声が掛かり、数年の勤務を得、国内需要が農学、特にアグリビジネスにある事を実感し、台湾留学にて修士号を取得した。現在は農林省の職員を本業としながら、4 箇所の私立大学で非常勤講師をしている。科目は、英語・アグリビジネス・アグリマーケットを担当し、給与は 1 時間あたり 20US ドルである。その勤務形態は激務で、1 日に 6 時間以上の授業を行う日もあれば、土日にも授業を持つ事もあると言う。以前はより多くの勤務をこなしていたが、精神的疲労や身体的健康が危ぶまれた為、制限している。

表 3 A1 教員年譜

A1 大学教員のライフストーリー	年	年齢	内的要因	エピソード	外的要因
	1993	21	医学部を諦める	王立プノンペン大学入学(生命科学)	親からの金銭的支援が十分でなかった
	1997	25	修士課程進学に向け稼ぐ必要	私塾にて英語の教授職に就く	科学の需要がない為英語で就職
	2000	28	農業開発に携わる	NGO職員へ転職	国際展開のNGOからオファー
	2005	32	科学の需要に限界を感じる	韓国に留学(MA:生命科学)	依然就職先がない
	2009	37	科学から農学に転向	農林省に就職	省庁から声がかかる
	2005	28		台湾に留学(MA:アグリビジネス)	
	2010	39	やり甲斐や希望を失う	農林省に復職	劣悪な労働環境
	2013	42	・勉学の継続機会である ・教育的やり甲斐が多い ・カンボジア発展の為 自らの知識を還元したい	副業として教授職を始める	子の学費を稼ぐ必要

教育は、我々の経済を発展させる唯一の方法です。
もし人々がまだ盲目であるならば、(手で目を覆う)「何が分からないのか」ということさえも人々は分からないでしょう。
彼らが勉強したくないのであれば我々の国は発展しません。
私のような教員や、他の研究員が勉強するだけです。
私たちは国を発展させたいと思っています。
私たちは彼らに(指を曲げ伸ばし)“勉強すること”を許してあげたいのです。
そしてまた、私たちはまた、教員や教授になることで自分自身のモチベーションを上げたいと思っています。(手を下から上に)
だからそれが、私が多くの大学で(手で場所を点々と示す)で教員をしている理由です。
(後略)

図 4 A1 インタビュー 00:36:42 の会話 (筆者訳)

それ程までに非常勤講師として働く理由は 3 点あると言う。1 点目は、家族・子供の為である。国家公務員の給与は月に 220US ドルと低賃金で、それだけでは生活が出来ない。更に、2 人の子供を月に 100US ドルの幼稚園に通わせ、今後も留学等多様な経験をさせ勉学に打ち込ませる為の貯蓄が必要である、という理由がある。2 点目は、教育機関に携わる事は自分自身の勉強にもなるという理由からである。将来的には PhD の取得を目指し、カンボジア国内に農学だけでなく化学の重要性も訴えていきたいと強く主張していた。周辺の東南アジア諸国を概観しても、その経済成長を支えた要因の一つは化学の進歩であると言う。現在、研究活動は農林省の業務としてのみであるが、時間的余裕さえあれば、自らの研究活動に従事したいと考えている。3 点目は、カンボジアの経済発展の為には、高度人材の育成が必要であり、自ら

海外留学で習得した知識を彼らに還元したい、という理由からである。

図 4 の発言からも見受けられる通り、A1 教員は、何故カンボジアは依然として発展途上であるのか、その問題に目を向けない学生たちに、頭を抱えていた。その要因は、勉強を進んで取り組まない学生が増加している事にあると言う(図 5 参照)。それは特に私立大学の学生に顕著に見られる。

(前略) もし大多数の(人差し指を立てる)生徒が公立大学で学ぶなら、彼らは良い仕事、非常に良い仕事を得るでしょう。(手でOKサイン)私立と比べたらね。まあ、でも私立はたくさんの生徒を得るためのお金を持っています。いくつかの私立大学は、生徒に気に入られようと必死でお世話ばかりしています。まるで生徒はお客様のようです。ハハハハハ。だから、生徒たちがタダで何かしようとすることに簡単に許可を与えたり、授業に遅刻することも見逃したり。それでどうやって勉強し、進級させようというのでしょうか？(肩をすくめる)だから、私は大学のルールを厳しくするように推奨しています。(後略)

図5 インタビュー 00:39:26の会話(筆者訳)

このような状況を改善する為、彼は最先端の電子機器に左右されない独自の授業スタイルを取っている。例えば、授業中の一切の電子機器の使用を禁止し、板書を義務付ける事や、自身も電子機器の使用は避け、配布物や提示物は紙媒体に統一する等、学生が勉学に集中するよう仕向ける努力をしている。しかしながら、その規則を遵守する学生は僅か30%程度だと言う。今後も一層学生の意欲を向上させる工夫を行っていくに違いないが、自身のPhD取得への意欲や国家公務員の低賃金労働に関する不満を多く漏らしていた事が印象的であった。

5. 示唆及び政策的インプリケーション

本研究を通して垣間見ることが出来た幾つかの発見、及び政策的インプリケーションとなり得る点を述べていく。

まず、先行研究では教員の学位、労働時間、給与といったデータを量的調査によって収集、分析している為に、いずれも数値上の議論に留まっていることがわかった。その結果、教授活

動の選択、継続に伴う教員の内的な動向を配慮しないままに「教員の質」を定義しており、その偏った分析や示唆には限界が見受けられた。特に、限られた資本を最大限有効に活用し、内発的な発展を促していく必要がある中、上記のような分析によって、「数値上では質の低さが露呈している、よって更なる資本の投資をすべきである」といった示唆に留まるのは、危険極まりない。このような背景に基づき、本研究においてはライフヒストリーを用いながら、教員の人間資質的側面、つまりモチベーションや意欲、教育観について分析した。

ライフヒストリー分析においては、個人を一般化して捉えることを避ける傾向にあるが、ここで得られた貴重な8名の事例の共通項を、ライフヒストリーの要素を踏まえ、時系列に沿ってまとめる。始めに、教授職を選択した動機はどれもポジティブなものではなかった。カンボジアにおいて教授職とは、就職しやすい職であるという共通認識があり、将来の目標を諦めざるを得なかった者や、金銭的な事情から副業

せざるを得なかった者が、選択する傾向にあった。しかし、その後の海外留学によって、国際水準の知識や人材に触れたことをきっかけに、自国が「途上国」であることを強く自覚することとなる。そして現在、8名全ての教員が語っていたように、「途上国の教員である」という強い自己認識を基に、「国を発展させる人材を育てたい」「若い世代へ知識を還元したい」「途上国であるという自覚を促したい」といった教授職への強固な意欲が形成されていったことがわかった。つまり、カンボジアの大学教員に、強いモチベーションの形成維持の過程が確認されたことから、高水準の教育的資質を備えていることが明らかとなったと言える。

しかし、筆者にとって想定外だったのは、パートタイムの大学教員が多く、その上研究をしていないと答える教員が大多数を占めていた点である。先行研究によれば、一定時間を研究に割いているはずが、本調査では国公立大学の教員一名を除き、研究を続けていると回答した者は一人もいなかった。更に研究をしていない理由としては、「時間がないため」というのが大半であった。また、これらの理由はインタビューアから聞くまでもなく、教員自らが発しており、つまり「研究をしなければいけない」「研究をしたい」という意識は持っているということが分かる。中には「このような研究をしたい」「こんな研究計画がある」と具体的に話し、博士課程の取得を目指す教員も多くいた。

更に注目すべきは、教員らが言う「時間がない」ことへの説明である。それは、他の学校、他の職種との掛け持ちが多く忙しいということに限らず、彼らがよく口にしていたのは「授業の準備がある

ため」という言葉であった。独自の教育観に基づいた授業スタイルがあり、学生に対し厳格な規制を定めるほど、そのこだわりは確固たるものであった。ここから筆者が考えたのは、少なくとも彼らの講義の質は高いのではないだろうか、ということである。もちろん、高等教育の質というものには様々な要素があり、本調査で実際に講義を見学したわけではないが、高水準にあるのではないかという印象を受けた。特に、日本において大学教員の講義・授業の質が問われ、学生に対する授業支援が強化されている昨今、今回のようなカンボジアの教員の例に学ぶところがあるかもしれない。

また、パートタイムの教員が授業準備にのみ集中できるという点では、研究活動が疎かになるという他に、事務仕事が少ないことも分かってくる。それは、事務が単純で、大学という組織が複合的な業務を担っていないことを暗示するほか、教員は雑用に時間を奪われることなく、本職であるところの教育・研究活動に専念できることも示している。また、大学教員という仕事に関して、「プレッシャーがなく、自由」「落ち着く」と話す者もあり、教員に責任がないことが問題視される一方で、当人らにとってはそうした開放的な職場環境が大きなメリットとなっていることも分かる。

総じて、本研究の問いであった、カンボジアの大学教員のモチベーションとは、(1)留学先で触れた国際水準の知識(2)途上国の教員であるという自覚、(3)国の発展を担う人材を育成、(4)勉学(博士課程取得のための)の継続、(5)圧力のない自由な職場環境、(6)憧れの教師の存在、という6つの要素から成るものであることが明らかとなった。

つまり、先行研究が示唆しているような、「質が低いから投資を」といった、一方的で安直なものではなく、このような強いモチベーションを持って教授活動を維持し続けてきた教員を認識し、評価することが、まず必要なのではないだろうか。限られたリソースを最大限有効に活用するためには、彼らのような高度人材を認識し、更に温め育てていくようなアプローチへと変更していくべきであるだろう。

最後に、研究課題への提案を行う。彼らのモチベーションの形成過程において、共通項であり尚且つ強い印象を残した要素は、「留学によって途上国の教員であると自覚した」ことであった。今回の調査対象となった8名の大学教員のうち7名は英語に堪能で、なおかつ海外の大学院で修士号を取っていたが、ほとんどの場合は渡航した先から奨学金を得ており、カンボジアからの奨学金ではなかった。しかしながら、奨学金制度を充実させるために、カンボジア政府に投資していくよりも、むしろ我々がカンボジア留学生に対し門戸を開き、受け入れる姿勢を見せる方が、金銭的な負担が軽減され、アクセスがし易くなるのではないだろうか。また既に実施されているように、海外交流プログラム等を通して、国際水準の知識を身につける重要性を認識させるきっかけづくりを行っていくことも有効であるだろう。更に、海外からの人的支援という観点では、教員養成のための人材派遣が重要視されており、既に教員となっている世代のためにもカンボジア国内で教育・研究スキルを学ぶ機会を設けることも必要となるだろう。つまり、安直な投資を促すことを避け、我々

が主体となって留学生の受け入れを実施したり、国際交流の提案を行ったりすることこそが、より多くの高度人材、更には高度な教育的資質を備えた教員を育成することとなり、「高等教育の質」の向上に影響を与え得ると考える。このように研究の裾野を広げていくことが、カンボジアにおける高等教育のあり方を方向付けることになるのである。

引用文献

- 亀崎美沙子(2010)「ライフヒストリーとライフストーリーの相違：桜井厚の議論を手がかりに」『東京家政大学博物館紀要』第15号, 11-23.
- 木根主税(2012)「ザンビア数学教師の教授的力量的形成における省察の役割に関する研究—授業日誌を用いた質的分析を中心に—」未公開博士論文(広島大学大学院国際協力研究科)。
- グッドソン, アイヴァー, F. (著). 藤井泰・山田浩之(共編訳). (2001)『教師のライフヒストリー—「実践」から「生活」の研究へ』晃洋書房.
- 小坂法美(2008)「ニカラグア小学校教師の自己認識による教授的力量的の変容—ライフヒストリー法による分析」『国際教育協力論集』広島大学開発国際協力研究センター, 第11巻, 第2号, 61-74.
- 小山悦司(1986)「教師の力量」岸本幸次郎、久高喜行(編)『教師の力量形成』ぎょうせい, 32-36.
- 小山悦司(1986)「教師的力量的の形成」岸本幸次郎、久高喜行(編)『教師の力量形成』ぎょうせい, 127-147.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフヒストリーの聞き方』せりか書房.

澤村信英(2005)「ケニア小学校教師のライフヒストリーから学ぶ—教育開発の新たな知識を構築する試み—」『国際教育論集』広島大学教育開発協力研究センター, 第8巻, 第2号, 9-99.

高井良健一(1996)「教師のライフヒストリー研究方法論の新たな方向—ライフストーリー解釈の正当化論理に着目して」『学校教育研究』日本学校教育学会機関誌編集委員会, 第11巻, 65-78.

中野卓、桜井厚 (共編). (1991)『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.

中村聡(2006)「ザンビア国中等理数科における教授の力量のありようと変容に関する考察—首都圏2 高等学校の教師が抱く力量観を手がかりに—」, 広島大学大学院.

[[http://home.hiroshima-u.ac.jp/babasemi/nakamura-aper2.pdf](http://home.hiroshima-u.ac.jp/babasemi/nakamura-paper2.pdf)] (2017年2月28日).

名越清家(2007)「教師の「ライフヒストリー」に関する一考察—「教師への過程」「重要な他者」「教育的信念」「学校観・教師観」等を基軸として—」『福井大学教育地域科学部紀要 IV(教育科学)』第63巻, 25-78.

藤澤伸介(2004)『「反省的实践家」としての教師の学習指導力の形成過程』風間書房.

藤原顕(2013).「教師のライフヒストリー研究に関する方法論の検討」『福山私立大学教育学部研究紀要』第1巻, 79-94.

山田富秋(2005).『ライフストーリーの社会学』.北樹出版.

山崎敬一 (編).『実践エスノメソドロジー入門』.有斐閣.

Millot, B., Dy, S. S. (2016). KINGDOM OF

CAMBODIA Higher Education Assessment. Asian Development Bank.

Kitamura, Y., Umemiya, N., & Osawa, A. (2015). *Quality of Education and Research at Higher Education Institutions in Cambodia: Results of the survey on university faculty members*. RIHE International Seminar Reports, 22, 37-53.

World Bank (2010). *CAMBODIA Higher Education Quality and Capacity Improvement Project*. Human Development Sector Department East Asia and Pacific Region.

Copyright © 2010-2017 Center for Advanced School Education and Evidence-based Research
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-based Research,
Graduate School of Education, The University of Tokyo
WEBSITE (日本語) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>
WEBSITE (English) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>